



## ※ ベトナム・カイバー集落調査

2003年、文化庁文化財部とベトナム文化情報省（現文化スポーツ観光省）との間で、伝統的集落および建造物の保存、修復、管理の分野における技術協力に関する協定が結ばれました。この協定のもと、奈良文化財研究所は、文化庁の要請を受け、2003～2005年度にベトナム北部ハタイ省ドゥオンラム村の集落調査をおこないました。調査後、ドゥオンラム村はベトナムの国家文化財に指定されました。2009年には新たな協定が結ばれ、引き続きベトナムの農村保存に関しての協力をおこなうこととなり、これまで中部トゥアティエン・フエ省フォックティック村、南部ドンナイ省フーホイ村について調査をおこないました。本年度は、南部ティエンザン省カイバー市の集落調査をおこなっています。

カイバー市は、ホーチミンの南西、車で約2時間のメコンデルタに位置し、メコン川やその支流を利用した水上マーケットで有名な街です。

この地域は、バーホップ川とその支流・水路に面して敷地を構え、かつては少数の大地主が広大な土地に水田を設け、水運を使って作物の流通をおこなっていました。しかし、分家や小作人の定着などで土地は徐々に細分化され、収益効率の問題から稻作からリュウガン、柑橘などの果樹栽培へと移行、



運河と集落の様子

船による運搬からバイクでの運搬へと変化してきました。現在は、短冊状の敷地の前面に住宅を構え、敷地背後に果樹園を設けるスタイルが主流となっています。

調査では、このような集落の構造や景観に関わる調査とあわせ、伝統的な民家建築や大工道具の調査をおこないました。この地域の伝統的な住宅は、入母屋造平入の主屋に、妻入の付属屋をつないで、正面1間に吹き放ちの屋根を連続させる形式が基本とみられます。内部は、古くは丸柱の総柱で、身舎梁行は虹梁形の貫で固め、束を立て、登梁を支え、棟木を受ける構造です。桁行は5間、梁行6間が基本で、身舎背面に装飾パネルを嵌め、登梁に彫刻を施します。正面側は中央に祖先を祀る祭壇を置き、その前面は接客空間として使用し、背面は寝室や物置などに使用しています。台所や浴室などの水回りは、主に付属屋や建物背後の小屋に位置します。このような基本的な構成はどの住宅でもみられる特徴ですが、20世紀後半に建てられた比較的新しい住宅では、小規模の住宅が増えたこともあり、基本様式は踏襲しつつも、各要素の簡素化がみられます。

以上のような伝統的な生活スタイルをもつこの集落も、徐々に近代化が進んでいます。本調査の成果により、より良い保存計画の策定・実行が望まれます。

（都城発掘調査部 大林 潤）



伝統様式の民家

## 発掘調査の概要

### 甘樺丘東麓遺跡の調査(飛鳥藤原第171次)

甘樺丘東麓遺跡の発掘調査は小規模なものも含めると今回で9回目になります。これまでの調査で、7世紀から8世紀にかけて、谷の埋め立てなど大規模な造成とともに活発な土地利用がおこなわれていたことが明らかになっています。

また、『日本書紀』によると皇極天皇3年(644)、甘樺丘に蘇我蝦夷・入鹿親子の邸宅が建てられたことが記されており、蘇我氏の邸宅と当遺跡との関連についても、関心を集めています。

今回の調査では、丘陵裾部の土地利用状況の解明と2009年度の調査で一部見つかっていた谷部の炭・焼土層の性格解明を目的としています。調査区を谷の出口付近に設定し、2011年9月22日から調査を始めました。

丘陵裾部の調査では、柱穴数基を検出しましたが、大部分は近世の段畑造成時に削平を受けており、古代の遺構は柱穴以外に確認できませんでした。谷部の調査では、谷の斜面に切り土や埋め立てにより平坦面を作っており、そこでは火を受けて地面が赤色化・硬化した痕跡が見つかりました。これらの被熱面の上には焼土・炭・土器片を含む炭混じり層が堆積し、その後、一気に谷を埋め立てている状況が明らかになりました。

出土した遺物から見て、この谷を埋め立てたのは7世紀中ごろのことであり、谷の平坦面で火を使用したのはこの直前のことであったとみられます。

この平坦面および、赤色化・硬化した遺構の性格解明に向けて、都城発掘調査部一丸となって慎重な検討を進めています。(都城発掘調査部 小田 裕樹)



赤色化した被熱面の検出状況（南東から）

### 檜隈寺の調査(飛鳥藤原第172次)

国営飛鳥歴史公園(キトラ古墳周辺地区)の整備工事が本格化するなか、今年度も檜隈寺周辺の調査をおこないました。今回は、以前から建物跡と想定されていた、中心伽藍南東方向にある土壇状の高まりを含めた調査区について報告します。

調査では、土壇状部分で、大型の柱穴を2基確認しました。2基の柱穴(掘方)の大きさや形は、およそ1辺1.5~1.8mの矩形をなし、深さ1.2mで、ともに柱根が残存していました。柱根間の芯々距離は約2.7m、柱根は直径約70cmもの太さです。2基を結ぶと、その方位は檜隈寺中心伽藍の方位の振れと一致し、さらに塔の中軸線がこの2基の間を通ると見ることができます。柱根の太さ、方位の振れ、位置を勘案すると檜隈寺に関わる施設の柱穴と見て良さそうですが、柱穴掘方からは、平安時代の土器が出土しました。したがって、7世紀頃の檜隈寺にともなうものではなく、重要文化財に指定されている、於美阿志神社石塔婆にともなうと考えられます。

この十三重の石塔婆(十一重現存)は、その様式から平安時代後期の作と推定されており、檜隈寺塔跡の中心に建っています。

柱穴はこの2基の他に関係する穴は確認されませんでした。したがって、屋根が架かるような建造物ではなく、幢竿支柱(儀式に際して幡や旗を付けた竿を支える柱)の可能性が高いと見ています。

檜隈寺を氏寺としたと見られる東漢氏<sup>やまとのかやうじ</sup>は、柱建<sup>おおはしらのあたい</sup>を競う儀式で高く太い柱を建てたので、「大柱直」と呼ばれたと、『日本書紀』(推古28年条)に記されています。今回の柱根は、年代的に直接この記事には関係しませんが、「大柱直」の心意気を感じさせる柱根と言えるでしょう。

(都城発掘調査部 黒坂 貴裕)



大型柱穴2基（南東から）

## 平城京左京三条一坊一坪の調査（平城第 486 次）

朱雀門のすぐ南東、朱雀大路に面する一角は、朱雀大路緑地と呼ばれる公園でした。平城京の条坊でいえば左京三条一坊一坪にあたり、平城宮の正門である朱雀門に隣接する一等地です。これまでの発掘調査では、奈良市教育委員会が朱雀大路沿いを中心に調査をおこない、坪を区画する築地塀が、東辺と南辺にはなかったことを確認しました。宅地や施設などの場合、築地塀で囲うのが一般的です。このことから、この坪の特殊性が指摘されていました。

ここは国土交通省が平城宮跡展示館を建設する予定地として、都城発掘調査部が昨年度から発掘調査をおこなっています。昨年度は南北に長い調査区を設定し、大きな井戸や掘立柱建物跡の一部を見つけました。今年度はその北側を中心に東西 48m × 南北 34m の調査区を設定し、発掘調査をおこないました。調査面積は東側の拡張区を含めて 1,668m<sup>2</sup>、期間は 2011 年 9 月 28 日～12 月 27 日でした。

調査の結果は予想を上回るものでした。調査区は南西方向に谷筋が通る旧地形に位置し、低いところに整地土を入れてならし、そのうえで鉄鍛冶工房が営まれていたことがわかりました。工房にともなう溝の埋土から、奈良時代前半の土器が出土しており、工房の規模や立地から奈良時代初頭の平城宮造営時にさかのぼる可能性もあります。

炉の規模は比較的小さく、赤熱した鉄を打つ台である金床石のいくつかが、原位置のまま残っていました。工房の周りには掘立柱がめぐり、長屋のような掘立柱建物で覆う構造です。今回の調査では、このような工房が 3 棟見つかり、調査区の南北にさらに広がることも確認しています。

このような鉄鍛冶工房は、7 世紀後半の飛鳥池遺跡、8 世紀中頃の平城宮馬寮でも見つかっており、今回見つかったものは、この両者をつなぐ時期にあ



炉、ふいご座、金床石が 1 セットになって並ぶ。

たります。炉跡や溝などの遺構の残存状況も良く、古代の鉄鍛冶工房の様相を考えるうえで、きわめて重要な発見になりました。

工房からは炉に風をおくる装置である「ふいご」につけられた羽口や、鉄を熱した際に出る鉄滓なども多数出土しました。この鉄滓の種類や大きさなどから、小型の鉄製品を鍛造した工房であることがわかります。工房は比較的短期間で操業を停止し、その後はまた整地土で埋め立てられています。

埋め立て後、調査区北東部分では堀立柱建物が建てられますが、柱穴が重複しており、数期にわたる建て替えがあったようです。それに対して、西側では工房が良好な状態で残り、埋め立てられた後は、ほとんど建物を建てた痕跡がないことがわかりました。坪を区画する築地塀がないことと考え合わせ、坪の西半分は広場のような空閑地であったこともわかりました。

昨年度に見つかっていた大型の井戸は、3 間 × 2 間の井戸屋形をともなうこともわかりました。井戸の中からは、天平 2 年（730）の年紀がある文書の軸をはじめ、土器や瓦などが多数出土しました。工房関係の遺物が少ないとから、井戸がつくられたのは奈良時代の前半で、おそらく鉄鍛冶工房の操業停止後と考えられます。井戸の廃棄は土器や瓦の年代から奈良時代の中頃とみられます。硯や奈良三彩も小片ながら出土し、「右相撲□」、「□撲司」などと記した墨書き土器も出土しました。

これらの遺物から、奈良時代の前半期に井戸の周囲には、公的な機関が存在した可能性が考えられます。主要な建物群は調査区より東側に展開する可能性もあります。1 月からは、この南側に調査区を設定して発掘調査を継続しています。

（都城発掘調査部 神野 恵）



調査区の全景(東から)。手前に井戸、工房は奥に見える。

## 明治時代の平城宮跡保存運動の資料

下の写真は、明治時代の手紙です。読んでみてください。意味がわかりますか？一読したくらいではわからないでしょう。ずいぶんたどたどしい文字です。悪く言つたら失礼ですが、ただ、書いている本人が無筆だと言つてゐるのですから、許してもらいましょう。この手紙は、明治時代に平城宮跡の保存運動に奔走した棚田嘉十郎の手紙です。奈良で植木屋をしてゐた人ですが、そのような一市民が、書けない字を書いて、一生懸命に運動している雰囲気が伝わってきます。このような資料を読み解いていくと、平城宮跡保存の歴史がわかってきます。

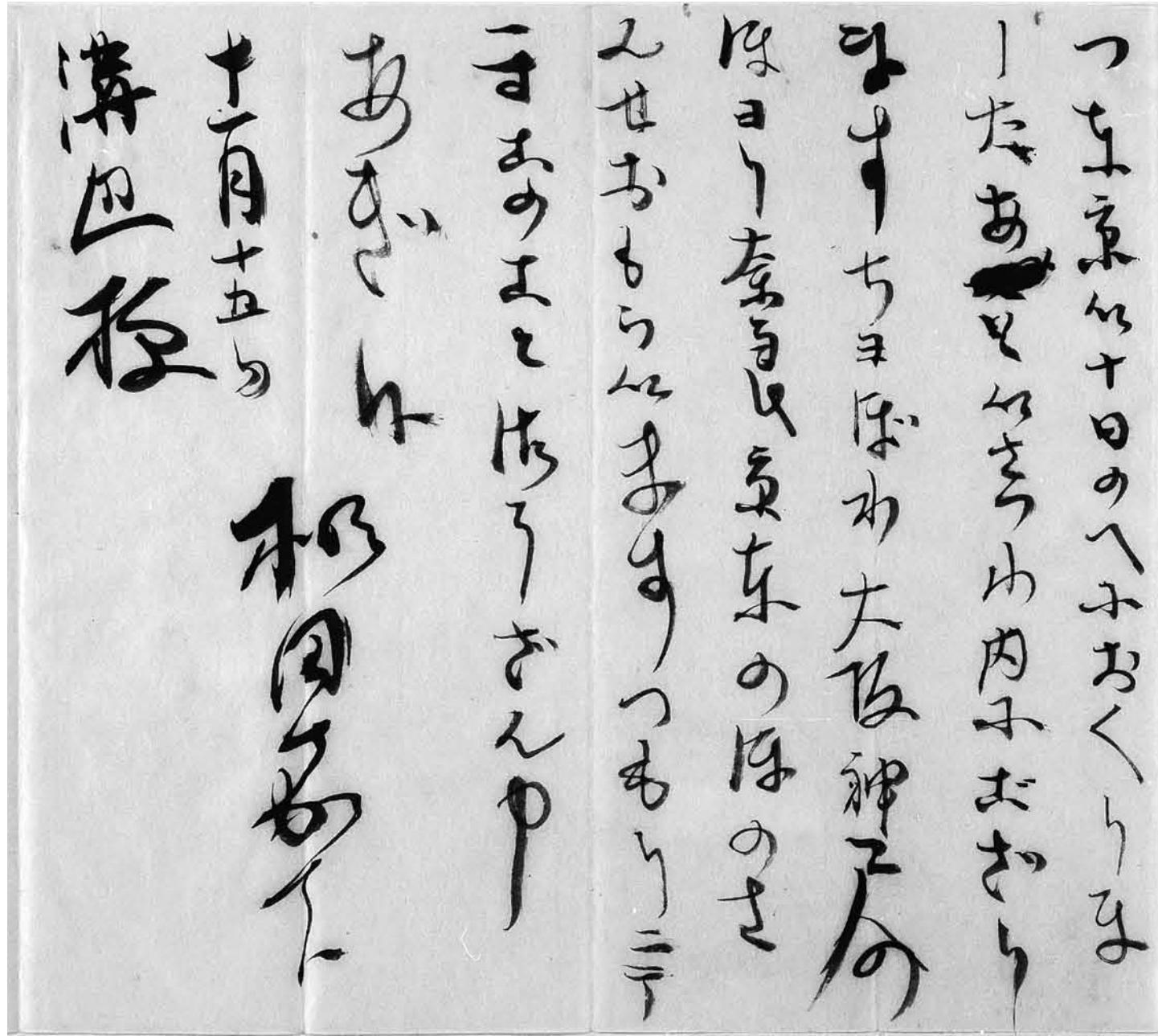
文字は右に示しておきました。署名簿(帳簿)に賛同の署名を集めている内容です。東京で華族の署名を集めていること、2冊目の新しい署名簿を作ったことなどが語られています。彼の最大の同志、溝辺文四郎に宛てた手紙で、溝辺家で今日まで大切に保管されてきました。右上の写真が、その署名簿の1冊目です。表紙には「平城宮舊趾紀念翼賛簿」とあるのですが、読めないほどに擦り切れているところに、その苦労がしのばれます。(文化遺産部 吉川聰)

第弐号の新ちヨミン式（冊）  
つこしらいまして、其内一さ  
つ東京い十日（日）へおくりま  
した。あ（冊）といさつわ内にござり  
ます。（帳簿ば）大阪神戸の  
ほより奈良京東のほのさ  
（賛成を貰い）  
んせおもらいますつもりニテ、  
一寸このこと御そざん申  
あ（げ）ぎ候。

十一月十五日

棚田嘉十郎

↓棚田嘉十郎自筆書翰（実寸大） 溝辺家所蔵





↑署名簿の表紙(右)と署名(左) 奈良文化財研究所所蔵 伯爵・子爵や県知事などの署名が見えます。

○「こ」は古のくずし字  
○「に」は尔のくずし字

まだこりから小杉様と龜谷様  
笠原様とくわどくくわいにだして百  
人以上のさんせおもてめ  
う脱(カ)手紙(手紙)が来たりか  
やろとのてがみおきたり候。  
（帳簿は）（冊）  
ちよばわ第式号の新ちよ  
ばわ式さつ十日（日）の間にこしらいま  
して、東京（に）いもいさつおくれ  
とてがみきましたので、

○「じ」は志のくずし字

人以上のかんせおもてめ  
やろとのてがみおきたり  
ちよほめあひそひの新ちよ  
ほめ式さつ十日（日）の間にこしらいま  
一車（車）もせつおく  
このまがみをひもたのを  
事（事）がそつ引（引）ちよそんニさ  
つ大（大）らかひもとてた内（内）

## 日韓発掘調査交流に参加して

奈良文化財研究所は、「日本国独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所と大韓民国国立文化財研究所の研究交流協約書」に基づく大韓民国国立慶州文化財研究所との「発掘調査交流合意書」により、1年ごとに約2ヶ月間、互いの発掘現場に研究員を派遣して、共同発掘調査を続けています。2011年8月24日から10月21日までの日程で渡韓しました。

今年度の発掘調査交流では、馬甲の出土などで有名なチョクセム古墳と、条坊の発見などが続き、注目が集まる新羅王京遺跡の発掘調査に参加しました。これらの遺跡がある慶州では、皇龍寺や雁鴨池など多くの有名な遺跡が集中しており、観光資源としての開発と大規模な発掘調査がめまぐるしい勢いで進んでいます。

発掘現場では、学芸士やそれを補佐する大学院生らと協力し合い、時に発掘の進め方や遺構の解釈などについて議論しながら、調査を進めることができました。両研究所の様々な人が、毎年定期的にこうした共同作業や議論を積み重ねながら、時に近づき、時に互いの違いを認識しつつ、交流を重ねていくことが、真の国際交流につながるものと信じます。

また、古都慶州の雰囲気を肌で感じられただけでなく、韓国の文化財研究所やそこで活躍する方々をとりまく環境を具体的に知ることができたのは、奈文研としての日韓交流を進めていく上でも大きな財産になりました。受け入れ先の国立慶州文化財研究所の方々はもちろんのこと、このような機会を準備して下さった全ての方々に感謝します。

(都城発掘調査部 庄田 慎矢)



チョクセム古墳での発掘の様子

## 奈良文化財研究所の発掘現場に参加して

大韓民国国立慶州文化財研究所と奈良文化財研究所は、2006年以来、発掘調査交流を続けています。今回は、慶州から7人目の奈文研への派遣となりました。滞在中には、2ヶ所の発掘に参加しました。発掘調査においては、個人の調査能力も重要ですが、研究員と作業員との意思疎通が何よりも大事で、遺跡に対する歴史的・考古学的理解の問題もあり、外国人である私が日本の発掘現場に参加することに負担を感じていました。しかし実際には、研究員の方々のおかげで困難を感じることはませんでした。

甘樺丘東麓遺跡では、現場での調査内容とともに遺跡の歴史的背景を大変興味深く感じました。絶対権力を誇った蘇我氏に関連する遺跡であり、発掘現場で見える遺構と遺物一つ一つに飛鳥時代の痕跡を探そうとしていました。平城京跡の発掘現場は、平城宮の造営過程を推論できる遺跡であり、これも意味深いものでした。遺跡を体感しながら日本の古代文化への理解を一步進めることができ、また奈文研の歴史にふさわしく堅固に体系化された調査システムを直接体験できたことは、今後の私たちの調査に大きな助けになると思います。

滞在中、二度の発掘調査現地説明会がありました。ともに悪天候にもかかわらず、数百名の一般の方々が現場に訪れたこと、また悪条件に屈せず準備する奈文研の職員の方々の姿に驚きを禁じ得ませんでした。その他にも、資料調査と埋蔵文化財研修への参加など、様々な活動に参加できました。現地での生活に不便のないよう、様々なご配慮を下さった奈文研の方々に心から感謝します。

(現・国立羅州文化財研究所 権 宅章)

(日本語訳：都城発掘調査部 庄田 慎矢)



所内での講演会の様子

## 第15回動物考古学研究集会の開催

2011年11月26・27日、平城宮跡資料館の講堂において「第15回動物考古学研究集会」が開催されました。

動物考古学とは、遺跡から出土する動物の骨から「人間が動物をどのように利用してきたのか」という、人間と動物との関わり合いの歴史を明らかにする研究分野です。動物考古学研究集会は、動物考古学に携わる研究者や学生を中心となって、研究成果を発表する場として毎年開催されており、奈良文化財研究所で開催されるのは9年ぶりになります。

今回の研究集会には54名の参加者があり、2日間にわたって、特別講演1件、口頭発表15件、ポスター発表11件の発表がおこなわれました。

特別講演では、松井章埋蔵文化財センター長が「歴史時代の動物考古学」と題して、古代における肉食や皮鞣しなど、これまで奈文研で進めてきた研究に関する発表をおこないました。口頭発表やポスター発表では、縄文時代から近世まで、動物に関わる幅広い内容の研究成果が数多く発表されました。また、日本国内の研究だけではなく、韓国や中国などの海外の研究や、民族考古学の調査報告といった興味深い研究成果も報告され、例年以上に多彩な内容の研究集会となりました。研究集会後の懇親会でも、発表者と参加者の間で、活発な討論や情報交換がなされました。

なお、今回の研究集会において、奈文研も参加する東日本大震災における「文化財レスキュ事業」への寄付金を募り、会場に来られた多くの方々にご協力を頂きました。この場を借りて、厚くお礼申し上げます。

(埋蔵文化財センター 山崎 健)



研究集会の様子

## 退職のひとこと

夢醒めてみれば...

昭和51年の春、私は奈良文化財研究所に入所しました。それまで続いていた複数採用の最後の年でした。小林謙一、巽淳一郎、清水真一の諸氏が同期生でしたが、皆さん私よりも一足早く奈文研を去られました。当時は皆まだ20代の若さで、中でも私は右も左もわきまえない最年少者でしたので、いろいろと面倒をおかけすることをほろ苦く思い出します。発掘調査も、まだバブルの最末期で、3ヵ月現場、3,000～4,000m<sup>2</sup>ほどが普通で、作業員も15人班の4班体制でした。地元採用の作業員、全60人で、作業長、副作業長、班長4名、2名ずつの副班長とヒエラルキーが整っており、今思えばいろんな意味で凄い活力にあふれた現場だったような気がします。ただ調査員のありようは、私の独断的感想ですが、全般的に余り統率されていない個人主義的行動パターンが色濃かったのではなかったかと、自省をかねて思い起こしています。

私自身は、とにかく訳がわからないままに、無我夢中で過ごしてきたというのが実感です。平城第二調査室から第一へ、そして藤原第一から第二、飛鳥資料館、平城第一と移り、その先は文化庁。6年ぶり奈良に帰還し平城第三から第一に移り藤原へ行き国際遺跡研究室へと経巡り、最後は振り出しの平城でアガリという、むしろめまぐるしい奈文研人生でした。ついに居所定めがたしというところで、いろんなことがありました。夢から目覚めてみれば、36年前のあの頃と同じ心象風景の中に佇んでいるかのようです。

もう一度繰り返してみたいかナ？

いや、もう十分ダナ。 (副所長 井上 和人)



飛鳥資料館で作業する執筆者 (1985)

飛鳥資料館 春期特別展 「比羅夫が行く—飛鳥時代の武器・武具・いくさー」

飛鳥に政権が置かれた7世紀は、中国的な中央集権国家を打ち立てる動乱の時代でした。百済をめぐる唐・新羅との戦、蝦夷や肅慎ら北方集団との戦い、さらに古代史上最大の内乱である壬申の乱など、さまざまな「いくさ」がおこなわれました。また、律令制の導入にともなって、身分を表すファッショնとして武器を身につけるようになりました。この結果、7世紀には、日本の武器や武具の大きな画期が生まれたとされます。

そうした時代、朝鮮半島や北方での戦に一人の将軍が関わったことが『日本書紀』に記載されています。阿倍比羅夫です。彼がみたであろう、北方地域や大陸との比較、唐の時代のファッションを通じて、飛鳥時代の武器と武具、そして「いくさ」を春の飛鳥資料館でご覧いただきたいと思います。(飛鳥資料館 成田聖)

会期：2012年4月14日（土）～6月3日（日）会期無休

開館時間:9:00 ~ 16:30 (入館は 16:00まで) お問合せ:☎ 0744-54-3561 (飛鳥資料館)

ギャラリートーク：4/15（日）13:00～ 5/12（土）11:00～ 5/19（日）13:00～

記念講演会：5月12日（土）13:30～「飛鳥の武器生産と東北」講師：豊島直博氏（文化庁）



平城宮跡資料館 春期企画展 「発掘速報展 平城2011／文化財レスキュー展」

毎年恒例の「発掘速報展」では、本年度調査した3つの遺跡（平城宮東院地区、興福寺北円堂院、平城京左京三条一坊一・二坪）を解説します。会場に足を踏み入れると、床には発掘現場の1／10の大きな遺構平面図が！発掘調査員になったつもりで、図面の上を歩きまわってみて下さい。

同時開催の「文化財レスキュー展」では、東日本大震災で被災した文化財の救援事業について展示します。現地での救援活動や現在も続く保存処理など、救援にあたった奈文研職員の声を交えながらご紹介します。

(企画調整部 渡邊淳子)

会期：2012年3月10日（土）～5月27日（日）

休館日：月曜日（月曜が祝日のときは火曜休館）

開館時間：9:00 ~ 16:30（入館は 16:00 まで）

お問合せ：☎ 0742-30-6753（連携推進課）

ギャラリートーク：会期中毎週金曜日 14:30～ ※5/4は除く

研究員が会場で発掘調査や文化財レスキューの解説をします。



## ■ お知らせ

藤原宮跡資料室 土日祝日開室記念展示

2012年4月7日（土）～5月6日（日）

「理もれた大宮びとの構顔

—藤原宮東面北門圓初出　土の木簾|

記 錄

現地説明会

- 飛鳥藤原第171次発掘調査(甘樺丘東麓遺跡)  
2012年3月4日 1,005名

○平城第488次発掘調査(平城京左京三条一坊一坪)  
2012年3月10日 850名

# 飛鳥資料館 冬期企画展

2012年1月20日～2月26日

「飛鳥の考古学 2011」 2,016 名

文化財担当者研修

- 遺跡等環境整備課程  
2012年1月10日～20日 13名
  - 保存科学Ⅲ（応急処置）課程  
2012年2月6日～10日 20名
  - 地質環境調査課程  
2012年2月14日～22日 9名

編集 「奈文研ニュース」編集委員会  
発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.go.jp/>  
Eメール jimur@nabunken.go.jp  
発行年月 2012年3月